

他者を支えようとする欺瞞に浸った自分からの再生の旅路

著：渡辺修宏

企画：渡辺修宏

小幡知史

二階堂哲

人の役にたつという生き方とは

「人様の役に立ちなさい」と教わったのは、いつのことだったのか。

原っぱをかけまわり、やたらと昆虫をおいかけた、物心がつくころ？

大好きだった幼稚園に通っていたころ？

それとも小学生時代？

・・・まあつまり、子供の頃だろう。母から言われたのだろうか。あるいは、今は亡き祖母に言われたのだろうか。まったく思い出せない。

でも、「人の役にたつ」とか、「人を支える」ということが、かけがえない大事な生き方として、私の人生につきつけられたことは、狂いようもない事実だったと思う。

子ども心ながら、「人の役に立つとはなにか」と考え始めて、何度も迷って、今に至っていると思う。

「役に立つ」ということは、人に喜ばれる生き方をすること。

「役に立つ」ということは、世の中で喜ばれる生き方をすること。

例えば、ノーベル平和賞受賞が目指せるような生き方とか、芸術・スポーツ・科学などの領域で活躍ないし貢献して、多くの方々に感動や夢を与えられるような生き方だと思う。

でも、「役に立つ」ということは、美して、尊くて、カッコいいだけではない。

「役に立つ」ということは、両義的だ。

「役に立つ」ということは、何かの、または誰かのために、自身の身を挺すること。

「役に立つ」ということは、何かの、または誰かのために、自身を消耗すること。

「役に立つ」ということは、献身、滅私、挺身、犠牲を回避できない。

それは、時に悲しかったり、辛かったり、あるいは、損を感じる生き方かもしれない。

私にとっての「役に立つ」とはどんな生き方なのか、という問いは、若かりし頃の大きな悩みであり、課題でもあった。

やがて私は、警察官とか、保育士という職業に目をつけた。

街の平和をまもりながら、自分の生活を謳歌すれば、きっとそこそこ楽しく生活できるのではないかと考えた。あるいは、無邪気な子どもたちの笑顔をみて、慈しみをもって彼らの成長にかかわれば、それは充実した人生と言えるかもしれないと感じた。

でも、結局、そのような道を、選ぶことはなかった。

騙し合い、せめぎ合いを避けるために

私が生きた青年時代には、高度経済成長期の絶頂と崩壊が蠢いていた。

バブル崩壊、連日の自殺報道、その背景には家族離散現象。

そんなニュースを横にみて、私は、経済システムを背骨に持つ社会の本質は、利益追求にあるようにみえた。その本質は副次的に、人の騙し合いやせめぎ合いを強め、「生き馬の目を抜く」ように、「生きたまま目をくり抜く」ような人間関係が蔓延っっていくように感じた。そして私は、とても弱い人間だった。騙し合い、せめぎ合いが蔓延る社会で、到底生きていけないと臆していた。

「いい大学にはいって、いい会社にはいって、出世する」とか、「スポーツや芸術で、道を究める」という選択肢を、私は早々と放棄していた。そのような選択肢を選べば、その競争過程の中で、過剰に傷つき、過剰に自身を失い、自分がボロボロになると思っていた。それが事実かどうかはよくわからないが、少なくとも私は、そのように感じていた。本当に私は弱すぎていた。傷つくことの耐性が、とても低かったのだと思う。

ここで具体的に、私の弱さの現れを1つ、告白したいと思う。

もう30年以上たつ、はるか昔のエピソードである。そして、私が背負った罪の1つである。そしてこのエピソードは、私の罪と同時に、私の中に生まれた人間不信の大きな萌芽だったような気がする。

高校を卒業して新たな学生時代が始まる春。

新しい出会いの中で、ある、新しい友人となるWが、私を含めて、近くにいた数名に声をかけてくれた。

「今からみんなでコンビニに行こうぜ」と。

なんなくの流れで、徒歩数分先のコンビニエンスストアに出かけた。いわゆる「友達づくりのプロセスとしての、なんとなくの流れだ」。

今ではまったく覚えていないないが、名前なんていうの？とか、どこ出身なの？とか、ニックネームはなに？なんて呼べばいい？みたな会話をして、7～8名で歩いたと思う。

やがてコンビニにつき、Wは、「今日は俺がみんなにアイス奢るよ」といつてくれた。

その時私は、Wに対して、「そういうふうに気前のいいところをみせてくれて、みんな

が仲良くできるようにしてくれているんだな」とか、「優しい人なんだあ」と感じた。

Wの誘いにみんなのって、おのおのアイスをつづつ購入し、コンビニの隣りにあった公園に移動し、アイスを食べながら談笑した。そして、皆でアイスを食べ終えた瞬間、Wが次のように発言した

「これで、みんな、共犯な」と。

この発言は、いったい、どういうことなのか。

実は、Wは財布を拾い、その財布にはいていたお金で、みなにアイスを奢ってくれていたのだ。そして、その事実を、すべて食べ終わった後に告白してくれたのだ。

私はひどくショックを受けた。その財布の持ち主が誰なのかと、Wに問うた。

Wは「知らない」といったが、私はその財布を奪って中を見てみると、学生証が入っていた。財布は、私たちの1つ上の学年の、見知らぬ学生のものであったのだ。

Wは財布を公園のゴミ箱に捨てようとしたが、私は、「せめて財布そのものと学生証は返そうよ」と意見した（なぜか、お金を返そうとは言わなかった。言えなかった）。

しかしWは何も答えず、むしろ、私の発言で、私たちを取り巻く空気が大きく変わってしまった。きっと私は、彼らの中で、浮いてしまったのだ。

誰かが小さな声で私に、「真面目かよ…」とつぶやいた。おそらく、私は皆に、白い目でみられたのだ。そこに居づらくなった私は、その財布と学生証を拾って、まるで逃げるように、遺失物取り扱い所にそれらを届けにいった。

その後のことはよく覚えてない。

はっきりしているのは、その日以降、私は学生生活で誰かまわす、距離をおいた人間関係しか作れなくなってしまったことだ。上で述べたアイス事件でひどくショックを受け、「人って信じられない」という疑心に浸ってしまったからである。

事実、私は、学生生活で少なくない、騙し合い、せめぎあいを目の当たりにした。

恋愛という名の裏側で蠢く、嘘、偽り、裏切り。心移り、二股三股、不倫。

お金や名誉のためなのか、窃盗、詐欺。

友達と思っていたけど、平気で他者を陥れる世界。

「心の友」とか「親友」とか「友情」というものが、まるで漫画の世界でしか存在しないような感覚を、生まれて初めて得た。やっぱりこの社会には、「生き馬の目を抜く」ように、「生きたまま目をくり抜く」ような人間関係が蔓延していると強く、強く感じていた。

そんな世界にうまく順応・適応できない自分を守るために、私はただ、距離を置くことしか出来なかった。つまり、「自分はその世界の住人ではない」というような感覚を稼働して、自分を保っていたのである。逆にいえば、そうでもしなければ、悲しくて、辛くて、やりきれなくて、耐えられなかったのである。

読者の方は、私に（いろいろな意味で）あきれるかもしれないが、アイス事件が大きな躰きとなって、私は、社会に適応できなかった、できなくなったのである。

対人援助という美辞麗句に溺れて、流され

まともに社会に羽ばたける気がしなかった私は、障害福祉領域に、自分の生き方を求めるようになった^{注1}。ボランティアや実習を通して、知的障害者とかかわりの世界では、上で述べた「騙し合い、せめぎ合い」がほとんどみられないと思ったからだ^{注2}。

知的障害を持つ方々の支援を通して、「人の役に立つ」生き方をしようと決心した。まだ、愛情とか、人の可能性というものを、盲目的に信じていた。

この後、私は、障害者施設に勤務しながら、職員による虐待案件と関わるのだが、それについては、「対人援助実践をリブートするこの一冊」の第1回で述べた。

詳細については、対人援助学マガジン第45号（2021）を御覧いただきたい。

⇒<https://humanservices.jp/wp-content/uploads/magazine/vol45/59.pdf>

さて、以降も私は、ずっと悩み続けることになる。きっと今も悩んでいる。

虐待は良くない！と、強い思いをもって仕事に励んだ私だが、かくゆう私も、「虐待とは一体なんなんだろう」とわからなくなったり、あるいは、「自身の援助が虐待というものと決定的に違うと、なぜいい切れるのだろうか」と、いろいろとためらいを感じるようになったり、とにかくわからないことの多さに先が見えなくなることが少なくなかった。

そして、また、幼少期からの重大な課題が私に眼の前に立ちふさがった。

「人の役に立つ」とは、どんな生き方なんだろうか。

人に喜ばれることを生業（仕事）にするのならば、人に喜ばれることによって対価報酬を得ることとなる。そうとなれば、そこでの手助けは、ある意味、お金のための手助けであって、本来的な手助けと、ほんの少しだけ、意味が変わるかもしれない。

自分は、知的障害を持つ方々の支援に携わっているが、それは本当に、「人の役に立つ」生き方なんだろうか。知的障害を持つ方々の支援と、知的障害を持つ方々を管理することは、一体何が異なるのだろうか。

わからないことが多すぎて、私はよく、それこそ頻繁に、落ち込んだ。

もしかしたら私は、対人援助という美辞麗句に溺れて、何もわからないまま、ただ飛び込んで、そんな自分の無知無能ぶりにあらがえず、虚しくて悲しくて辛かっただけかもしれない。そして、時に、ナニモカンジナイとする自分すら、創るようになった。

ナニモカンジナイとする自分でなければ、悩みや迷いに振り回されて、ろくに仕事ができなくなってしまう…そんな怖さが生じるようになったからだ。

読者の方はまた、お気づきであろう。なんともはや、私は、弱いのである。

子どもの頃から、そして、大人になっても、私はずっと弱いままであった。

注1 障害者福祉領域が「まともではない」とする趣旨はない。あしからず。

注2 知的障害があろうがなかろうが、人がかかわる世界においては、「騙し合い、せめぎ合い」は、あるところではあるし、ないところではない。それが自然なのだが、当時はそのように考えられなかった。

人の役に立つとは、自分を支えることでもある

やがて、私は、漫画「サ道」と出会った。

ご周知の方もいると思うが、ドラマ化もした、サウナの漫画である。

なんと、ひたすらサウナにはいるだけの漫画である。

ただ、サウナにいて、水風呂にはいて、外気浴する（だけの）漫画である。

エンターティメントというより、フィクション、あるいは、ドキュメント漫画といったほうがよいかもしれない。なにしろ、実在するサウナ施設、実際の経営者や従業員もガンガン登場するのである。

その漫画の中で、私と同じ中年である主人公が、ひたすらサウナに通いながら、ひたすら自身と向き合うのである。

ネタバレをさけるためにこれ以上詳しくは語らないが、私はこの漫画を通して、自身が模索してきた生き方の、隠れた一面をみつけた気がした。

それはつまり、「人の役に立つ」という生き方は、「己の役に立つ」、すなわち、「自身を支えるために、自身のために、自分自身で、自身を支えることが必要」ということであった。

私はこの気づきを得て、ちょっと反省した。

「人の役に立つ」ということを、偉そうに考えていた自身の傲慢ぶりに気づいたからだ。

弱い、弱すぎる私が、まるで「自分ならできる」とばかりに偉そうに、「人の役にたとう」としていたことこそが、私の盲点だったのである。

まず…、自分をしっかり支えなくては。

サウナに行こう。私は涙して、そう思った。

きっと私は、「人の役に立つ」なんて立派に語れる、立派な生き方をしていない。できていない。

でも、それでもいい。

やりたかったらやるし、できなかつたら、できないだけである。

それよりも、まず、自分をしっかり支えて、自身をもうちょっと強くして、それからまた、ゆっくり、しっかりと、考えたいと思う。

サウナに行って、何もかも、流してしまつて。

—つづく—